

セクシュアリティ

私たちの“性”と“生”

～アン・ディクソン氏のセクシュアリティワークショップに参加して～

さる2009年11月28日・29日、アン・ディクソン氏によるトレーナー会員向けワークショップ「セクシュアリティ」が開催されました。

セクシュアリティとは自分自身の“性”と“生”をまるごと愛すること。自分の体をバラバラに分解して、「太すぎる・細すぎる」、「大きすぎる・小さすぎる」などと物のように扱うのではなく、体の声に耳を傾け、統合された存在として自分をとらえることを大切にします。ワークショップでは、アン・ディクソン氏の「やり方や行為などの“誰と誰が何をした”がセクシュアリティだと思われているが、実は“個人の内側の力”に基づく“私たちのあり方”が大事」という話を皮切りに、一人ひとりが自分自身のあり方そのものを真剣にみつめる2日間となりました。

今回の特集では、ワークショップに参加した4名の女性に、率直な感想を語っていただきました。



私らしくあるということ

● Aさん

アンさんのワークショップに前回に続いて参加。今回の私の状態は、ちょーサイテーでした。

今の組織で働くことすでに26年。2007年1月に、直属の上司の病気休職から、急きょ彼の仕事を引き継いで4部署を統括する本部長になりました。組織初の女性本部長だといわれ、気負いばかりが先行しました。目の前に仕事は山積み。とにかく片っ端から片付けてきたけれど、私の心に去来するのは、「これでいいんだっけ？ なんでもっと早く気付かなかったんだろう？ また、失敗！ 私みたいな本部長で本当にいいんだろうか？」という疑念と不安だらけ。自分に自信がもてず、気もちは沈み悩んでばかりでした。

私の価値は他人より上？ それとも下？

アンさんのワークショップでは、「はしご」理論が私の認識に再登場。これは、女より男がえらい、

部下より上司が上といったように、とかく相手との関係をはしごの上と下に置いて価値を決めがちだという考えです。アンさんに、「自分をふりかえり、本当に対等にふるまっているか、気もちの中はどうか？をよく考えてみて」と問われました。

部下との関係では対等になるよう努力していますが、本部長としては、他の本部長と自分をすぐ比べてしまいます。とりわけものごとがうまく進まない時に、「だめだ、私ってやっぱり最低の本部長。でも、女なんだしできなくたって、、、」なんて、簡単に性差別的な思考を言い訳に使うこともあります。

また、女性としては、既婚で子どもがいて夫とうまくいっている幸せそうな人は、はしごの上。一方、「負け犬の遠吠え」に三重にも四重にも輪をかけた私のような（未婚、恋人も子もなし、まもなく50歳！）は、やっぱりだめな人間だとすぐレッテルをはっていました。